

『大乘五門実相論』について

— 敦煌写本中の地論宗系『大集經』注釈書 —

石 井 公 成

一 はじめに

筆者は、敦煌写本を調査した際、北地の地論宗では『大集經』が重視されており、地論宗には『大集經』を最も尊重する系統もあったことを明らかにした。⁽¹⁾ただ、その際、現存する唯一の『大集經』注釈(断簡)である地論宗系の敦煌写本、『大乘五門実相論』(北八三七八「騰六」、BD〇三一〇六)については、簡単に紹介するにとどまったため、本稿ではこの注釈の特色について検討したい。

二 『大乘五門実相論』である『大集經』注釈

「自体縁集」を説く地論宗文献である本写本は、首部と末尾を欠いており、現行の『大集經』六十巻で言えば、「不可說菩薩品」の途中の解釈から始まり、「虚空藏品」を欠き、「宝幢分」に移って「魔苦品第一」「往古品第二」「魔調伏品第三」と進み、「三昧神足品第四」の内容に触れるものの項目名と

しては別立せず、「相品第五」に移って、その途中で終わっている。全部で四百九十行が残っており、一行は二十七字前後であって、北朝末期の書写と思われる。

僧祐『出三藏記』卷九「大集虚空藏无尽意三經記第五」では、曇無讖訳には二十九巻本と二十四巻本があり、後者では「虚空藏品」を欠くとある(大正五五・六三上)ため、この注釈は二十四巻本に基づくことが知られる。⁽²⁾

本写本で注目されるのは、品ごとの冒頭に次のように記されていることであろう。⁽³⁾

宝幢初魔苦品第一 大乘五門実相論

宝幢分中往古品第二

宝幢分中魔調伏品第三 大乘五門実相論

宝幢分中相品第五 大乘五門実相論

魔苦品第一・魔調伏品第三・相品第五については、『大集經』の品名が示されたうえ、それに続けて「大乘五門実相論」という別名が記されている。つまり、本書は、『大集經』の注

釈であると同時に、五門によって大乘經典が説く法の実相を示す文献なのである。一方、『大乘五門十地実相論』（北八三七七「露〇四三」）は、似た名が示すように、ほぼ同じ時代の成立であって、ともに五門による解釈を行なう地論宗文献であるが、『大乘五門十地実相論』は『十地経論』の注釈であるため、現代の諸目録が両書を同一書としているのは誤りである。⁽⁴⁾

「五門」については、青木隆氏と荒牧典俊氏が明らかにしたように、西魏の丞相、宇文泰が組織させた「第一仏性門、第二衆生門、第三修道門、第四諸諦門、第五融門」の五門を指す。⁽⁵⁾ 本写本では、「問曰、修道門中、何以数数魔来（問いて曰く、修道門中、何を以てしばしば魔来たるや）」（一四三行）とあるため、宝幢分中で魔がしばしば登場する品々が「修道門」に割り当てられていたことが知られる。魔の様々な主張が論破される点が実践によって煩惱を克服していく過程に通じる⁽⁶⁾と解されたのであろう。

五門のうち、最も重視されていたのは、当然ながら「第五融門」である。青木氏によれば、宇文泰のもとで編集された『二百二十法門』では、この「第五融門」は「入不二法門、三空法門、十一空法門、十八空法門、法界体性門」の五門に分けられており、最後の「法界体性」は『華嚴経』『大集経』『法界体性無分別経』（『大宝積経』『法界体性無分別会』）等が説

くとされるものであるという。すなわち、融門とは、「不二や空、法界体性に基づき、諸法の平等、諸法の融即を説く思想であつた」⁽⁶⁾のである。

実際、『大乘五門実相論』では、「法界体（性）性」やその類の語を盛んに用いて諸法の融即を説いている。例えば、如来声聞而有差別、法界体性、言秘理妙、実無差別。（四十八、九行）

の個所では、如来と声聞とは区別があるものの、「法界体性」については、その表現は深秘であつてその道理は神妙であり、その立場からすれば区別は無いことを強調している。

自從陀羅尼品来至此品、凡有八品。『経』正明法界体性、性絶分別、離有無、非内非外義。（二三〇～一行）

ここでは、陀羅尼品から魔苦品まで八品有るが、『大集経』はここでは正に、「法界体性」は本質的に分別を断ち切っており、有無の対立を離れ、内でも外でもないという道理を明らかにしていると説くのである。また、

自下、正出法界体性平等之道。即是破魔患義。善男子、若能觀上来如是等法、是名菩薩不親近惡友、并復速得菩提。（二九八～九行）

とも述べられているため、本書の著者は、『大集経』は「法界体性」の立場で諸法が平等であることを示しており、これを觀じて通達することこそ「魔患」を打ち破る道なのだ、と

『大乘五門実相論』について（石井）

見ていることが知られる。すなわち、經典解釈が修行と結びついているのである。『大集經』が北国禪師によって重視されたのは、こうした点によるものであろう。

三 「法界体性」「法界実相」「法界円道」の強調

『大乘五門実相論』では、「法界体性」以外にも、「法界実相」「法界実相円道」「法界実性」「法界円道」などの語を盛んに用いているが、このうち、『大集經』で実際に用いられているのは、「法界実性無作無為」（大正十三・八七上）という「法界実性」の一例のみであり、他の語は『大集經』には登場しない。この「法界実性」にしても、他の經論でよく用いられた用語ではなく、菩提留支訳『大薩遮尼乾子所說經』序品の「一切皆修如実法界境界諸行、一切皆入法界実性、一切皆得無障無礙虚空境界殊勝妙行、一切皆得無所著行……」（大正九・三一七中）という「法界」を強調した個所、および、淨影寺慧遠『十地經論義記』に「法界実性、是仏境界」（続藏四五・一〇三上）とある以外には、唐代以前で術語として用いられた例がない。

「法界実相」は、唐代以前では灌頂が修治した『法華文句』と灌頂自身の『觀心論疏』に各一例見えるのみであり、前者は修禪に関する部分で用いられているため、北国禪師などの用いた語であったことが推測される。「法界円道」に至っては、

他には全く見えず、『大乘五門実相論』特有の語となっている。つまり、これらの用語は、『大集經』そのものに基づくものではなく、おそらく『十地經論』とそれに基づく大乘經典研究の過程で生まれた教学に基づき、『大集經』をそうした思想を説く經典として尊重しているのであろう。つまり、「法界」「実性」「実相」「体性」「円道」などの個々の概念が追求された結果、それらを組み合わせた術語が生まれ、諸法の根源を示す表現として用いられるようになったものと思われる。

たとえば、「受施者異、施者亦異。是則名為分別法界。若不分別法及供養受者施者、是則不名分別法界」（大正十三・八八中）とあるように、『大集經』では、布施において「施を受ける者」と「施する者」は異なると見るのを「名づけて法界を分別すと為す」とし、諸法を分別せず、布施する者・受ける者・布施される物を分別しなければ、「法界を分別すと名づけず」と述べ、三輪清淨の思想を示しているが、『大乘五門実相論』はこの個所について、「是則不名分別法界実相（是れ則ち法界実相を分別すと名づけず）」（七〇行）と述べており、經文では「法界」となっているところに「実相」の語を補って「法界実相」としている。これによって、『大乘五門実相論』は無分別の立場こそが「実相」だと見ていたことが知られる。

これは、『大集經』に基づく解釈である。その「不可説品」では、この品が本来は単行經典であつたことを示すように、末尾で「此經名為方等大集、亦復名為不可説」(二二六行)と述べ、この經典を『方等大集』と名づけ、また『不可説』とも名付けると述べている。これについて、『大乘五門実相論』は、「法界円道、体非分別、離分別相(法界円道は、体は分別にあらず、分別相を離る)」(二一八行)と説明しており、法界は言葉による区別を超えているという点を強調している。『大乘五門実相論』は、他の個所でも、「法界絶於分別。……法界絶於名相。……法性体中、実不可説」(二八六・九行)とあるように、「法界」「法性体」は分別・名相を絶しており、不可説であることを強調するのである。

『大乘五門実相論』は、「往古品」の冒頭では、「自下、正出法界体性平等之道。即是破魔患義」(二九八行)と述べ、この品以降は「法界体性・平等の道」を示しており、これは魔がもたらす障害を打破するためとする。つまり、魔は偏った主張をする存在であり、その害を除くために「法界体性・平等之道」を説いたのである。これは、不可説というだけでなく、対立する諸要素の平等性を体得することが、魔の偏りから逃れる方法だと見るためであろう。『大乘五門実相論』では、単に不可説を説くばかりでなく、不可説でありながらもなぜ説くことが可能であるのかを論じ、可説と不可説

『大乘五門実相論』について(石井)

は平等であることを強調するのである。

『大乘五門実相論』が不可説を説くだけでなく、「中道」を強調し、対立する要素の「平等」「俱融」「双融」「無礙」「無障礙」を盛んに説くのは、このためであろう。五門文献は、こうした教理を展開していたからこそ、義湘(義相)の『華嚴経問答』⁽⁸⁾は、「自体縁起」の立場で「無礙自在義」を説く「五門論者」の主張は智儼の「別教一乘普法」と「別ち難し」(大正四五・六〇二中)と認めざるを得ず、そのうえで華嚴宗独自の思想を展開していったのである。

『大乘五門実相論』が「法界体性」の立場で現象と「無相」など対立する要素の融合をはかり、「無障礙」や「円」を強調する点は、『融即相無相論』(北八四二〇)と同じだが、「中道」を重視するのは『大乘五門実相論』の特徴である。本書では、「中道には幾くの義有りや」と問い、「六種中道」「円寂寂照中道」(三一八行)を説いている。ただ、中道の重視はこの点では、『仁王般若実相論』などにも見られるため、地論宗にはそうした傾向があつたことが知られる。義湘『一乘法界図』が智儼・法蔵と違って「中道」を重視するのは、三論宗に加え、『大乘五門実相論』のような系統の地論教学の影響であろう。

『大乘五門実相論』について（石井）

四 禅宗の先駆となる要素

『大乘五門実相論』が「中道」や「無礙」を強調しており、対立の融合をめざしていたことは上述した通りだが、否定的な主張が目立つのも事実である。しかも、そうした記述には、後の禅宗の主張を思わせるものが少なくない。たとえば、「不可説菩薩品」の「無入之入名為法入。無門之門名為法門。無作之作名為法作。無禪之禪名為正禪」（大正十三・八六中）という個所を解釈するに当たっては、次のように述べている。

問曰、何故名「無入之入」。答曰、法界真実体、実無出入。從真証入於平等故、名之為「入」。「無門之門」、名為法門。「無門」者、実相寂滅、無有通以不通故、名「無門」。内方便義、牀通無礙、名之為「門」。「無禪之禪」、名為法禪。「無禪」者、至道寂滅、名為「無禪」。内方便澄湛、名之為「禪」。（三・五行）

すなわち、『大集經』が「無入之入」「無門之門」「無禪之禪」といった主張をするのは、「法界真実体」の立場に立てば、言葉で示されるような固定した「門」や「禪」は無いのである。それこそが真実の「門」であり「禪」なのだといふのである。「無門」については、『無門関』が示すように後代の禅宗で取り上げられるようになるが、『大集經』のこの「無禪の禪」の個所に着目したのは、『宗鏡録』と『圓悟仏果禅師語録』のみのようである。

禅宗を思わせる表現としては、「若有菩薩觀戒」已下、正明無相持戒」（一九九行～二〇〇行）という個所も注目される。「不可説菩薩品」末尾の「若有菩薩觀戒」（大正十三・九二上）以下の部分について、「無相持戒」を明かしたものと解釈するのである。「無相持戒」は禅宗で用いられた用語ではないが、「無相戒」の先駆となる思想と評価することができよう。

さらに注目されるのは、右の議論に続いて、「就平等以明禅（平等に就きて以て禅を明かす）」と述べ、禅には何種有るか」と自問して『楞伽經』の四種禅によって次のように答えている点である。

問曰、禅有幾種。答曰、要有四禅。何者為四。一者愚癡凡夫禅。二者觀察第一義禅。三者真如禅。四者諸仏如来禅。（二〇四～六行）この四種禅は、表現としては菩提流支訳『入楞伽經』の四種禅説に最も近い。

また、『大乘五門実相論』では、魔王波旬が、「自分は繫縛されておらず解放されてもいないのに、行くことができない」と歎いた個所を釈す際、次のように説いている。

「無繫」者、本自無繫。今何所放。……菩提之体、無有得者。是故、即無繫縛之相。（二六〇～三行）

ここでは、もともと繫縛は無い以上、どうして解放されることとがあるかと述べ、「繫縛」の相などとも無かつたことを強調している。これは、『二入四行論』長卷子において、

心を安んじてほしいという願いに対して、禪師が、絹布が無い場合、どうして職人に衣を作ってもらえようかという諭えによって心の不可得性を教示している個所に通じるものがある。むろん、『大乘五門実相論』は經典解釈にとどまるが、ここで議論されているようなことを身をもって実践していけば、禪宗に近くなるであろう。禪宗は、地論教学が栄えた北地で、地論宗の仏性思想などを受け継ぎながら、文字面の研究だけにとどまる風潮に反発して登場したことを考えるべきであろう。

なお、『維摩經』の天女を思わせる宝女が説く「世間不信之人、是仏也」（大正十三・八六下）といった逆説的な主張について、『大乘五門実相論』は「返常之説」と称し、「有無双融」の主張と見ている（三十一～四行）。この「返常之説」という表現は、南朝の文献では「反常之説」に作るのが普通であり、「返常」となっている形は、敦煌写本の昭法師の『勝鬘經疏』に見られる。また、『華嚴經問答』は、一乗縁起を理解する方法として「返情」の方便をあげ、「隨所聞之法、不取如聞、即能解其所由。又即解法実性也（聞く所の法に随ひて、聞く如くに執らざれば、即ち能く其の由る所を解す。又た即ち法の実性を解するなり）」（大正四五・六〇九上）と述べているが、これがまさに地論宗の「返常之説」を受け継いで実践方法としたものであることは、「法界実性」を省略した形である「法実性」

『大乘五門実相論』について（石井）

の語を用いていることから知られる。

五 著者と成立年代

本書については、五門の分類を用いる地論宗南道派の文献であることは疑いない。青木氏の分類によれば、法上（四九五～五八〇）の『十地論義疏』、著者不明の『二百二十法門』『大乘五門十地実相論』『本業璣珞經疏』などとともに東魏・西魏の時代の五門文献であって、「第二期 發達期」という位置づけとなっている。

このうち、『本業璣珞經疏』については、『十地論義疏』卷三と大正蔵八十五卷に収録されている『十地論義疏』卷三（S二一〇四）と約三百五十字にもわたってほぼ一致することが指摘されているが、⁽⁹⁾『大乘五門実相論』は次に見るように、『十地論義疏』卷一とかなり一致している。

『大乘五門実相論』…

『論』云「菩薩尽」、即是其事。躰障者、窮実而言、一仏備一切、是合理之解。若一切備一、覆成其障、何者是也。調衆果中多百多千束是其事。正以縁智在壞故、一仏体上分別作無量仏解釈。以是因縁故、覆障法身如來、不能円明。独顕称周法界。是故、『地論』云、「金剛藏入体性三昧、十方世界、有心有相、皆入金剛藏身中、智見通如來、形充法界、周円百万億阿僧祇世界。（八四～八八行）

『大乘五門実相論』について（石井）

法上『十地論義疏』卷一..

「仏尽」者、果徳円備体障尽。障者、窮実而言、一仏備一切。是合理之解。若一切備一、覆成其障、何者是也。稠衆果中多百多千、即是其事。正以縁智在懷。一仏体上分別作無量仏解。以是故障法身不顯。故『論』云。金剛藏菩薩入体性三昧。十方世界有心有相、皆入金剛藏身中。智見通如來、形充法界。周圍百万億阿僧祇世界。（大正八五・七六三下）。

法上『十地義疏』の影響のもとにあることは明らかであるため、『大乘五門実相論』は、六世紀半ば頃に、法上の弟子か法上に近い系統の人物によって書かれたことが推定される。

- 1 石井公成「『大集經』尊重派の地論師」（駒澤短期大学研究紀要）第二十三号、一九九五年三月。石井『華嚴思想の研究』春秋社、一九九六年に再録。
- 2 石井『華嚴思想の研究』では、「虚空藏品」は隋代に挿入されたと記した（五一五頁）が、誤りなので改める。
- 3 本写本からの引用は、金剛大学校仏教文化研究所編『蔵外地論宗文献集成』（二〇一一年）において筆者が担当した翻刻によるが、形式を日本の通常のものに改め、異体字は通行のものに改めた。
- 4 『大乘五門十地実相論』ならびに諸目録における同書の記載の問題点については、山口弘江「『十地論義疏』と『大乘五門十地実相論』—周叔迦説の検討を中心として—」（『東洋学研究』第四十八号、二〇一一年三月）参照。

- 5 青木隆「地論宗の融即論と縁起説」（荒牧典俊編著『北朝隋唐中国仏教思想史』法蔵館、二〇〇〇年）、同「敦煌出土地論宗文献『融即相無相論』について—資料の紹介と翻刻—」（『東洋の思想と宗教』第二十号、二〇〇三年三月）。荒牧典俊「北朝後半期仏教思想史序説」（荒牧典俊編著『北朝隋唐中国仏教思想史』法蔵館、二〇〇〇年）。

- 6 青木隆「敦煌写本にみる地論教学の形成」（金剛大学校仏教文化研究所編『地論思想の形成と変容』、国書刊行会、二〇一〇年）五十六頁。

- 7 坂本廣博「諸法無諍三昧法門と大集經」（『印仏研』二十八卷一号、一九七九年十二月）。

- 8 『華嚴經問答』が法蔵撰でなく、義湘と弟子の問答であることは、石井『華嚴思想の研究』（春秋社、一九九六年）で論じた。
- 9 藤谷昌紀「敦煌本『本業璣珞經疏』の引用経論について」（『大谷大学大学院研究紀要』十九号、二〇〇二年）。

〈キーワード〉 地論宗、『大集經』、法界体性、法上、五門

（駒澤大学教授）